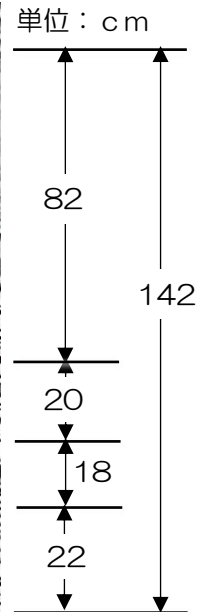
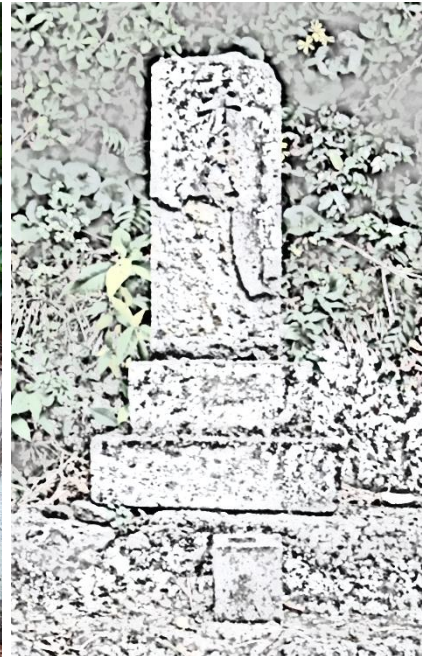


【93】大田市仁摩町仁万天神 仁摩小学校下（宮本 仁 01/㊦-㊦-69） 井戸正明……

所在地 大田市仁摩町仁万天神 仁摩小学校下 前谷工務店前
 北緯35° 09' 07.79" / 東経132° 23' 56.52"

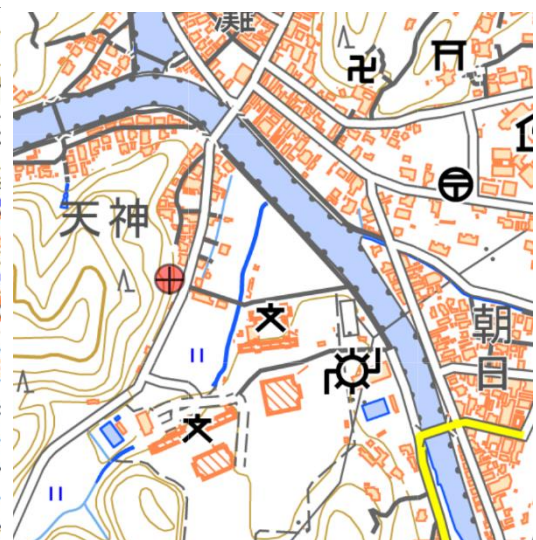


碑石幅 35 / 奥行き 26
 台石1段目幅 49 / 奥行き 42
 台石2段目幅 65 / 奥行き 56
 台石3段目幅 128 / 奥行き 100

（調査日2020年11月20日）

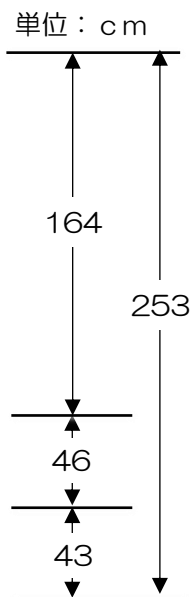
「調査の経過」
 仁摩小学校の下、大田西中学校の横に当たる。道路の海側に岩盤を削って広場を作り、碑の前には山茶花が植えられるなど庭園風のしつらいだ。碑は福光石で傷みが激しく、剥落も多くて、宮本調査では建立者の名前が「本地亀五郎」と読めたとあるが、調査日には読めなかった。場所が海に近いので傷みが早かったと思われる。

【建立年】明治30年（1897）
 【建立者】不明
 【碑石前面】井戸……（宮本調査では「井戸正明……」）
 【碑石右面】享保十八年五月廿五日死去
 【碑石左面】明治三十年八月六日「台石」なし



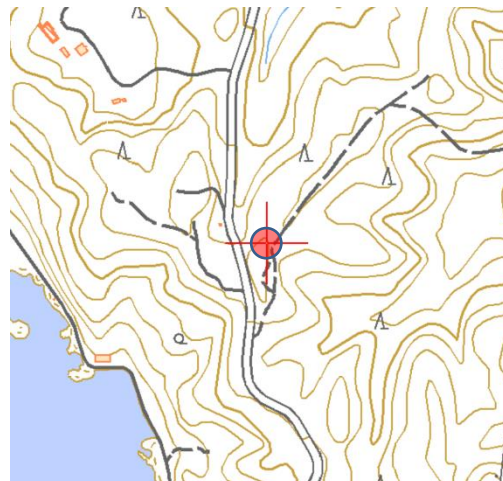
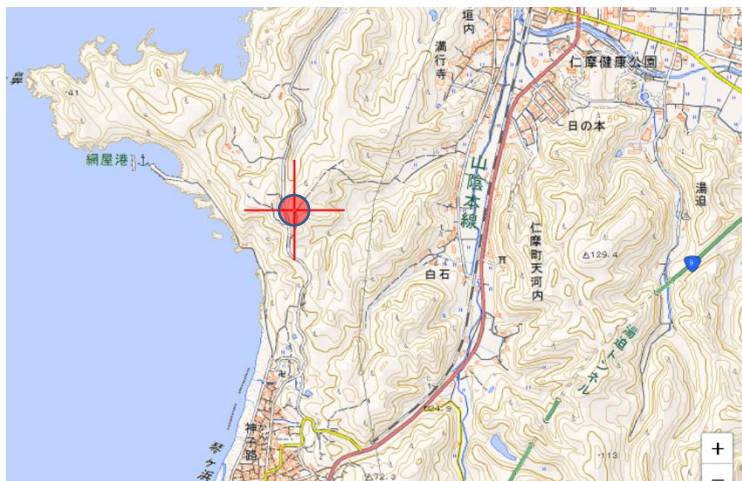
【94】大田市仁摩町天河内（宮本 仁 02/ローター 70） 泰雲院殿義岳良忠居士欽徳碑

所在地 大田市仁摩町天河内 天河内から馬路に抜ける里道沿い（馬路の琴ヶ浜展望台から100m北の、右手に地蔵がある場所から里道に入って約200m）
 北緯35°08'49.20" / 東経132°23'57.00"



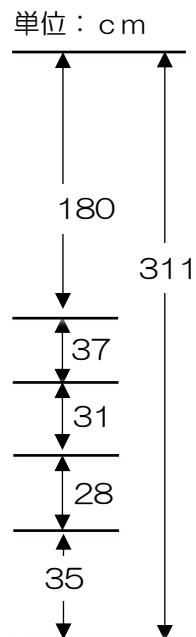
碑石幅 47、奥行き最大 27
 台石1段目 最大幅 87、同奥行き 60
 台石2段目 最大幅 170、同奥行き 124

【建立年】不明
 【建立者】不明
 【碑石前面】泰雲院殿義岳良忠居士欽徳碑（蓮の花）
 【碑石右面】「享保十八癸丑五月廿六日……」と思われる文字があるが不鮮明。
 【碑石左面】文字が彫ってあるが不鮮明で読めない。
 【台石】自然石で刻字なし
 【調査の経過】馬路から海岸通りを進み、琴ヶ浜展望台を過ぎてしばらく行くと、貯水タンクの手前約100mあたり道路右側に小さな地蔵があり、そこから里道を約200m進んだ場所にある。周囲には人が居住した名残りが残り、石碑の場所は約1mの石垣を積んだ平地が整備され、中央部の階段を上がると広場の中央部に石碑がある。石碑は白っぽい少し粗めの自然石で硬く、まだしっかりしている。左右の文字は浅く彫られたためか読むのが難しい。広場の整備や碑石、碑文を見ても、かなり費用をかけた立派なもの。宅野の石碑の石庭を参考にしたのだろうか。
 （調査日2019年2月22日）



【95】大田市仁摩町宅野 波啼寺上 (宮本 仁 04/ロ-列-68) **井明府報徳碑**

所在地 大田市仁摩町宅野 波啼寺の右側にある往還道の上り坂を約700m上がった峠の広場
北緯35°10'08.37" / 東経132°24'48.05"



碑石最大幅 70、奥行き最大 70
 台石1段目 最大幅 135、同奥行き 135
 台石2段目 最大幅 136、同奥行き 130
 台石3段目 幅 170 / 奥行き 162
 台石4段目 幅 205 / 奥行き 190

【建立年】元治元年（1864）
 【建立者】不明
 【碑石前面】井明府報徳碑
 【碑石その他・台石】刻字なし

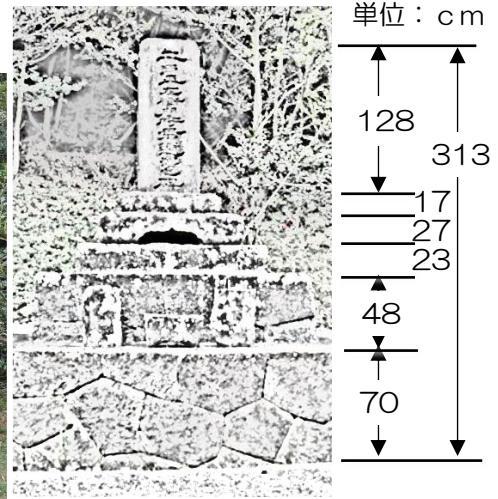
〔調査の経過〕郷土資料によると碑石前面の文字は弘化2年（1845）幕末の三筆の一人、貫名海屋が宅野逗留中に書いたとされる。碑石、台石にはほかに文字はないが、石碑前の石灯籠には右が「奉燈 / 本邸中 / 元治元年甲子五月 / 小松屋政右衛門 / 世話人叶田屋恒平」左には「同上 / 阿波屋惣四郎 / 世話人浅屋吉助」とあるので、石碑を中心とした石庭は元治元年（1864）の建設と推察される。4段目の台石に置いてある線香立てには中央の窪みに家紋のようなものがあり、右に「川合屋」左に「当中」とある。

この場所は宅野と五十猛を結ぶ往還道の峠の広場で、向かいには茶屋もあってにぎわったという。当時の宅野の有力者たちが、この場所にふさわしく、また海屋の書に恥ずかしくないようにと、たくさん大きな石を運び込んで石庭を建設したのである。行きかう人々が井戸公に思いを寄せた風景が蘇る。

大田市内で唯一、市の文化財に指定されている井戸公碑だ。
 （調査日2019年2月24日）



所在地 大田市仁摩町大国 石見城下
北緯 35° 08' 26.02"
東経 132° 25' 09.86"



単位：cm
碑石幅 49／奥行 33
台石1段目
幅 79／奥行 62
台石2段目（猫足）
幅 110／奥行 93
台石3段目
幅 140／奥行 119
台石4段目（石組）
幅 190／奥行 171
台石5段目（石組）
最大幅 378／奥行最大 343

（調査日 2020年 11月 20日）

周囲には松や山茶花が植えられており、公園風のしつらいになっている。近くには世界遺産石見城の解説板もあるので、石見銀山を訪れる人の中には、この立派な井戸公碑を見学する人もあるだろう。

宮本調査では勝音寺のデータが記録されているが、碑石、台石とも元のまま使われているようだ。傷みはなく、文字もはっきり読める。

〔調査の経過〕

石見城のふもとの旧道沿いに広場を整備して建てられている。

この碑はもともと川西地区の勝音寺にあったものを大田町文化推進協議会・井戸公石碑移転建設委員会が町内から寄付を募り、この場所に移転した。

〔建立年〕平成元年（1989）再建
〔建立者〕大田町文化推進協議会・井戸公石碑移転建設委員会
〔碑石前面〕井戸平左衛門府君遺澤之碑
ほかには文字はないが、碑の左隣に石の解説版が設置されている（碑文は次葉に記載）





井戸平左衛門(正明)公は石見銀山第十九代代官として享保十六年(一七三一)から同十八年迄三年間務められた。当時は享保の大飢饉の最中で西日本に於ける餓死者は十数万人におよんだといわれる。この時幕府の命令にさきがけて官庫を開いたり年貢の減免などを決断しその上私財を投じて領民を救いさつま芋栽培の奨励をして「いも殿様」とあがめられた。その遺徳を偲ぶ頌徳碑は県下全域に建立されている。本町にも先祖が建立した稀に見る程の立派な石碑が元勝音寺境内に設置されていたがこの程人目にふれるこの地に移転して末永く井戸公の恩に報いることとした。

平成元年(一九八九)

大国文化推進協議会

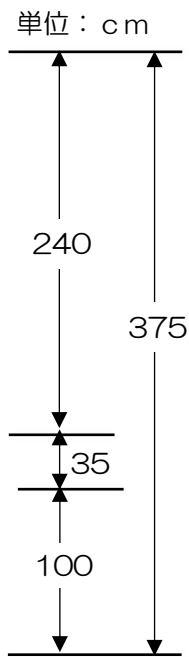
碑文揮毫 安政三年

選書揮毫 近藤芳樹

(歌人・書家)周防(山口)の出身にて国学を学び号を寄居子庵という。宮内省文学御用掛をつとめ明治十三年八十才で没す。

【97】大田市仁摩町馬路 乙見神社 (宮本 仁 03/□-列-72) 永欽遺澤

所在地 大田市仁摩町馬路 乙見神社境内 (本殿右隣)
 北緯 35° 07' 31.93" / 東経 132° 23' 52.64"



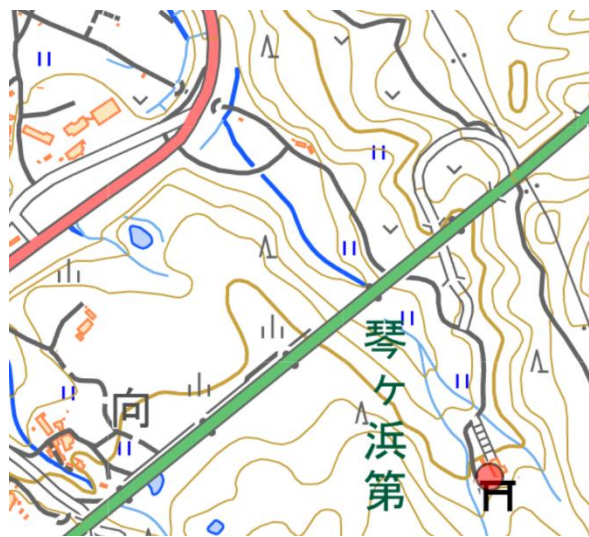
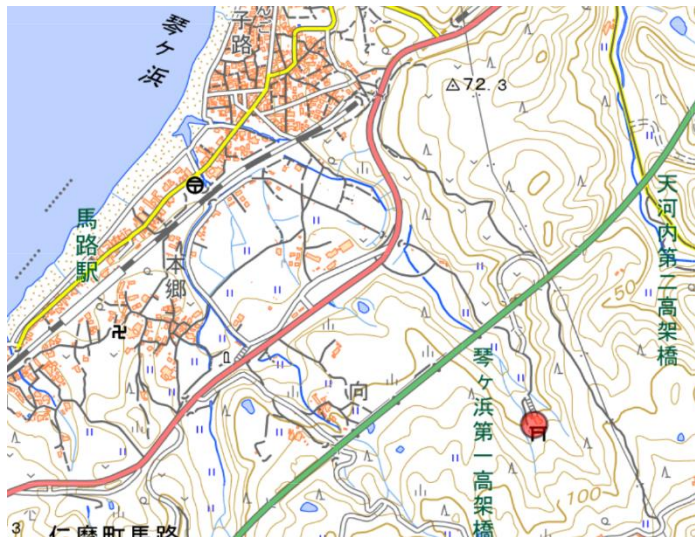
碑石最大幅 78、奥行き最大 65
 1段目台石幅 35、奥行き 165
 2段目台石 (石組) 最大幅 285、奥行 240

〔調査の経過〕
 乙見神社拝殿の右手奥に7段の石段があり、上がると井戸公碑が建っている。ほぼ本殿と同じ高さになる。「永欽遺澤」の文字は中央によっており、上にも下にもスペースがあつて、特に上は家紋か梵字でも彫るつもりだったように不自然なスペースだ。台石2段目は3段の石組で幅も奥行きもあり、かなり堂々とした碑だ。碑石の左右には碑文と世話人の名前が彫つてあるが、石が軟らかいのか、文字は痩せて読みにくい。ただ剥落や痛みは見受けられない。

〔碑石前面〕 永欽遺澤
 〔碑石右面〕 碑文 (次ページ記載)
 〔碑石左面〕 幹事 / 山崎五次 / 山崎弥三郎 / 船原庄三郎 / 松浦和兵衛 / 田中□□ / 松浦□□ / 松浦與七郎
 〔台石〕 なし

〔建立年〕 明治16年 (1883)
 再建
 〔建立者〕 馬路村

(調査日 2020年11月20日)





是井戸君平左衛門某之碑也君之來令于此懸元享保十六辛亥年其善政盡行不□枚
舉矣壇其觀土空而移甘薯其澤於黎庶雖經幾千歲不可磨滅者也宕嚴明治十五壬午
五月廿六日為百五十回忌辰而旧碑已茂缺矣於是村民相糺結据數月更建新碑以表
欽慕之意云尔而題碑面者龍谷學士大淵鉄熙記其由者本邨□生恒三惠建

明治十六歲次癸未五月□旦

位三□志